

野尻氏の文に添えて

僕も我が日本に於いてカノープスの発見者だらうことを、小さい誇りとしてゐる。今から十何年前、僕の家が、京都の三本木にあつた。頼山陽の家の御隣りだ。其の三本木の家から、毎日毎夜、僕は自轉車に乗つて大學へ通つた。道のりはせいせい十丁ばかり。何も自轉車などに乗る必要は無いのだが、そこがソレ、天文家業の必要上、「ソラ晴れた！」となると、一刻の猶豫もなく星を捕へるために大學へ馳け出さなければならない身分であつた。それで、晝となく、夜となく、荒神橋の橋の上を、西から東へ、又、東から西へ、空を案じ々々、馳けたものであつた。

或る夜のこと、それは確か寒い一月の中頃の、午後十時過ぎであつた。例によつて自轉車のハンドルを握りしめながら、宅から大學へ、荒神橋をわたる其の橋の上で、走りながら、遙か南の低い空を見ると、漸く人通りも少なくなつた三條四條あたりの橋の上 1° — 2° ばかりの所に、僕と同じく橋の上(?)を東へ馳ける一つの火があるではないか！ 橋上の人の高さにしては、チトばかり高過ぎる！ サテ何だらうと、僕が、いぶかりながら、立ち止まれば、火も立ち止まる。こちらが動き出せば、火も亦同じ方向へ動き出す。試みに、逆行すれば、火も逆行する。

そこで始めて、之れは人の火でなくて、天空の星であるを知り、大學へ着いてから、圖を調べて見て、其れが名にし負ふ「カノープス」巨星であるを知つた始末である。其れからは、毎日、荒神橋上を通る毎に、カノープスが見えない日は淋しかつた。

しかるに京都が發展するにつれ、カノープスは漸次光り淡くなり、殊に歐米から歸つた大正15年頃からは、市街の電燈のため、全く見えなくなつた。それで、大に悲觀してゐたのだが、昨年以來、はからずも、花山に移つて、又々、なつかしいカノープスが毎夜のように見え出した。

大正 5—6 年頃から、ひそかにカノープスと遊んでゐた人は、僕より外にあるまいと思ふが、如何!? (山本生)